

アナーキスト大学生入門

ボクはアナーキスト大学生を自称している。キケンなヤツだと思われるかもしれないし、当たっているところもありあながち嘘とも言い切れないので否定するつもりはないが、別にボクは無政府主義者ではない。アナーキーとは、語源的に an-archy, つまり「反-支配」である。それは、自分の気に入らない不当な支配は拒否し、自分の好きなように自分の人生は生きるというある種の<叫び>に過ぎない。けれど、そういった自分の<叫び>を持つことこそが、毎日楽しく、元気よく生きるコツだとボクは思っている。今、大学のキャンパスの中で「楽しく、元気よく」生きている学生がどれほどいるだろう。受験生の君たちが思い描くキャンパスライフと現実のものとの間には、少なからずギャップがある。大学生になって1ヶ月も立たないうちに五月病になる連中は実は山ほどいるのだ。今回、お世話になった先生の依頼で書いているこの原稿は新大学生への手引書となれば幸いである。つまり、ボクが自分の体験から、新大学生に毎日、楽しく、生き生きと生きるための、アナーキスト大学生になるコツを伝授しようというわけである。

そもそも、ボクがアナーキストを自称し始めたのは、大手予備校の東大模試においてだった。ときどき、成績優秀者の欄に明らかに本名ではない変な人がいるが、そういう人にボクはなりたかった。それで、「アナーキスト・コン」という名前で模試を受け、見事、成績優秀者の欄に載ることができた。驚きだったのは、受験生は暇なのかそういう欄を丹念にチェックしているやつは相当にいて、大学入学後「キミがアナーキスト・コンさんですか、びっくりしました！」と多くの人に声をかけられることだ。ボクはごく狭い領域での有名人らしい。ネットで検索すると、ブログや2ちゃんねるに「アナーキスト・コン、キター」みたいなことが書かれてある。そういえば、模試の答案が返却されたときにも「ここがアナーキストさんのお宅で大丈夫ですか？」と配達員を焦らせてしまった。色んなところにご迷惑をかけているアナーキストだなあ、と思う。

ボクが「アナーキスト・コン」になりたかったのは、やっぱり自分の変な性格によるところが大きいのだと思う。小さい頃から、人とズレたことをするのが大好きで、周りと同調することができなかつた。人の集団があれば、そうい

う浮いた子は必ず何人かいる。そういう子が元気よく生きるコツは、自分を承認してくれるシステムをうまく作ることだ。人は社会からの承認がなければ生きてはいけない。大学の環境は、どんどん承認を求めるのが難しい方向に行っているように感じられる。フツーに社会に溶け込んで楽しく生きていける人は問題ない。この「手引き」は、フツーでは満足できない人たちに特に書かれている。そういうある種の変人、変態たちが、人と違った生き方によって、尊厳を得られるコツなのである。人とズレた君ほど、アナーキストの素質がある。さて、その「コツ」を5つほど立ててみたのが、次のテーゼだ。

<アナーキスト大学生になるための5つのテーゼ>

- i) 大学の中にとどまらないこと。外に出て行け。
- ii) 自分の好きなこと「だけ」やれ。
- iii) 変なやつが集まる少人数授業に顔を出し、彼らと仲良くなること。
- iv) とにかく本を読むこと。
- v) 教官と仲良しになること。

普通の大学生があまりやらないことを積極的にやるのが大事で、そのための基本となる方針を挙げておいた。もちろん、もっと色んなアナキーが存在するだろうが、とりあえず5つだ。空気を読まずに、自分を信じて行動しよう。さて、1つ1つ説明していくことにする。

- i) 大学の中にとどまらないこと。外に出て行け。

大学の中には基本、何もないと思った方がよい。あるのは、人と本と場という資源である。それらがあることは貴重だが、それ以外は特に何もないと思った方がよい。つまり、大学が何か自分にしてくれるとは思わないことが重要だ。大学というところは、時間とやる気さえあれば、何でもできる場所だが、結局は何も出来なくて終わりうる場所でもあるのだ。大学という資源を自分から徹底的に活用してやろうという姿勢がない限り、結局は何も出来ないで終わると思った方がよい。そして、それら資源は、どの大学でも探せばピカイチのものが必ずある。見つからないのは、探す努力をしていないのだ。

大学の中の資源を活用することも大事だが、大学にこだわる必要は全くなく、面白いものは大学の外にあることが多い。実は面白いことをやっているやつと

というのは、大学の中に留まらず、積極的に外に出ていっているやつだったりする。そして、大学の外に行くことで視野が広がる。人のつながりやインターネットなどを利用しながら、どんどん外に足を運ぶことをおすすめする。そうして、自分の居場所を見つけて欲しい。

ボクのことを書いておこう。ボクは駒場で立花隆というジャーナリストが主宰するゼミナールに参加した。ジャーナリズムなので、キャンパスの外に出て行き、色んな人に取材して、記事にする。ボクたちは学生運動をテーマにリサーチを行った。そうして人の輪が外に広がり、大学の内側にこもっては絶対にできないような体験を多くした。立花隆氏の協力も得て、駒場祭でシンポジウムを行い、大教室で立ち見がでるほどのイベントを主催することもできた。ボクたちがリサーチを行った 2008 年は、学生運動の火花がピークだった 1968 年の 40 周年にあたり、ボクたちの活動は、一連の懐古ブームの火付け役の 1 つに少なからずなった実感がある。今では、ボクは某政治系雑誌社に出入りし、雑誌の特集を組んだり、書籍出版のお手伝いをしたりしている。加藤登紀子さんの本『登紀子 1968 を語る』（情況新書）は、ボクがインタビューをした。

その他にも、色んなシンポジウムに顔を出したり、研究会に参加したりしている。こうやって、色んな人と友達になれることも、大学の外に足を運んでいける成果である。

ii) 自分の好きなこと「だけ」やれ。

アナキストとして、これは大事である。人間とは根源的に自由なのだ。だから、自分の嫌なことはやらなくていい。自分の好きなことだけやったらいい。そうしたら、いつのまにか自分のなりたいものに自分になっているのである。

自分のことは最小限にとどめるが、今、ボクはアルバイトで塾の講師をしているときと、本を読んでいるときが 1 番楽しい。人を育てるといことは思いのほか楽しい。分からなかったことが分かるようになり、教え子が喜んでくれると、こちらまで幸せになる。そういう報いがあるから、相当な時間とエネルギーを費やせる。一方、本に関しては、新しいことが分かったとき。「そうか」とこれまで見えなかったものが見えるようになることは、ある種の革命である。良い本を読めば、革命が自分の世界に起こる。＜世界革命＞の心地よさが自分のエネルギーになる。ボクが塾で教え子に熱心に指導するのは、彼らに＜世界革命＞を起こさせることにつながるのだろう。常に、自分に＜世界革命＞を起

こし続けて、回転 (revolve) しながら楽しく生きること。それが、自分の好きなこと「だけ」をやるということである。

大学でもそうだ。出たくない授業は出なくていいと思う。もちろん、その分のツケは自分が背負わなければならない。けれども、その分、自分のやるべきことをしっかりやり、有意義な時間を過ごせばいい。教授もそう言っている。ある方は「大学とは、いかに授業に出ずに自分の好きなことをするかという場所なのだ」と言っていたが、一理ある。

iii) 変なやつが集まる少人数授業に顔を出し、彼らと仲良くなること。

大学で大事なことは良い仲間を見つけることだ。しかし、仮に自分とものすごく気の合う人が同じキャンパスにいたとしても、その人との物理的な接点があれば、友達になることはできない。実際問題として、友達を作れる場というのは限られていて、サークルか授業くらいのものだ。よって、大学内では、自分と気の合う仲間が足を運びそうなサークルや授業にこちらも足を運び、積極的に話しかけるとするのが一番現実的な仲間作りの方法だ。

おすすめなのが、皆があまり取らないような授業を取ること。そして、ゼミなどの少人数の授業を取ることである。ボクの経験からお話すると、例えばアラビア語の授業に出たが、そこに集まってくるのは変なやつが多かった。あとは、立花ゼミなど、ゼミというのもいい。ボクはいくつかのゼミを経験したが、やはりハードコアなゼミにはハードコアな人たちが集まってくる。ゼミは飲み会などが開かれる場合もあるし、そういった場は活かしたい。

東大は内向的な人が多いが、それではダメだ。自分から話しかけたり、企画をしたりすることが大切。知り合いはそういった授業で知り合った子を集めてホームパーティをしていて、すごいなあと思った。人をつなげる、人がつながることにより化学反応が起こるかもしれない。

iv) とにかく本を読むこと。

自分が面白い人間であれば、自然と面白い人たちは寄ってくる。類は友を呼ぶという言葉がある。大事なものは、常に自分を磨き続けること。そのための基本となるのが、大学生ならまず読書だろう。忙しい中でも、がんばって本を読み続け、頭を鍛えておくこと。あとは、できればそうやって貯めた知を実践的に使うこと。できれば、役に立つ情報はノートにまとめた方がよい。能動的な

読書を目指すこと。

分野は何でもいいのだ。自分が「これだ！」と思うことを研究し、それを他人に広げていくこと。その循環が出来ている人は生き生きとしているし、そういう人のもとに自然と人は集まる。いわゆる知的活動とは違うフィールドの人でも、やっぱり大事なのはあきらめずに「まだまだ」と努力し続けていること。目の輝きを失わせないことでしょう。

v) 教官と仲良しになること。

普通の大学生は教官と関係を築こうとしない。「教官と仲良しになる」というのは意外と重要なのである。空気を読まずに、何の遠慮もなしに教官に質問しに行ったり、話しかけたりしにいったらいい。多少の失礼はあるかもしれないが、こちらがちゃんと勉強していれば、多くの教官は許してくれる。自分を偉いと勘違いしていてふんぞり返っている教官は相手にしなくていい。そういう非活動的な教官はどうせ大したことはない。面白い教官をゲットして、知的会話を交わしてみよう。そうやって、仲良しになった君が尊敬する教官が君に与えてくれた言葉は、その後の人生において宝物になるに違いない。

もちろん、ちゃんと勉強していくことは前提だ。カスミみたいな質問しかできないようでは、教官は心を開いてくれない。少なくとも、教官の著作を読んでいく。それで、教官の興味・関心を把握した上で、自分の意見を素朴にぶつけてみよう。開かれたマインドを持った教官は、素人の意見こそ貴重がり必ず聞いてくれる。そうして、対話が生まれるのである。

教官の人となりは、著作を読むことと、それから実際に会って話してみることの2つそろってはじめて分かる。肩書きや学問的成果に左右されずに、人となりをみて「この人はこういう人だ」というのが分かるようになれば一人前である。若くてまだ学問的成果はないがものすごい先生というのが、探せば必ずどの大学にもいる。そういう自分の尊敬する教官を見つけて、その人について回って勉強できれば、それが理想だと思う。

とりあえず、思いつくところは以上だ。こういったことを、本気で実践すれば、必ずや面白い大学生活が待っているだろう。人と違うことをするというのは前提として、その上で、大事なものは、諦めないこと。常にアンテナを張り、自分をつねにオープンであらせ続けよう。そして、チャンスがあれば必ずトラ

イしてみよう。閉じているのは世界ではなく、君の心である場合が多い。「大学が面白くない」と愚痴る前にアナーキスト大学生になってみよう。そうすれば、これまでと違った世界が君を待っているに違いない。

アナーキスト・コンより